天草富津地区における小学校に着目した文化的景観保全に係る活動に関する研究*

Study of action for cultural landscape preservation focus on elementary school in Tomitsu aria, Amakusa*

原嶋香菜子**・田中尚人***・岩田圭佑****

By Kanako HARASHIMA**, Naoto TANAKA*** and Keisuke IWATA****

１．はじめに

(1) 背景と目的

近年，人口減少や産業衰退により地域の個性や，潤いのある生活環境が失われつつある地域が増加しており，景観まちづくりへの需要が高まっている．筆者らは，景観まちづくりの要件として，①行政・地域住民・アソシエーションの３ステークホルダーによる協働が見られること，②風景の中に地域の価値が認識され，その価値が共有されていること，③持続可能性があること，を考える．近年，全国的にみられる文化的景観の保全活動においても同様の要件が必要とされており，景観まちづくりと文化的景観保全はほぼ同義であると考えている．本研究では，景観まちづくりに関する地域社会の協働過程を記述することを目的に，地域住民の母校となる小学校区に着目して，天草富津地区を対象に文化的景観保全に係る活動について考察した．

(2) 研究対象地の概要

天草市は，2006 年（平成 18）３月 27 日，本渡市，牛深市，河浦町など２市９町が合併して誕生し，2012 年３月時点で，人口 90,561 人の市町村である．研究対象地である熊本県天草市河浦町富津地区（図-1）は，農村集落である今富地区と漁村集落である﨑津地区からなる人口 1,058 人（今富：410 人，﨑津：648 人）の町である．少子高齢化などの影響を受け，天草市では公立学校の統廃合が進み，平成 25 年度以降，一小一中体制となることから，富津地区唯一の小学校であった富津小学校は，河浦小学校として他の小学校と統合されるため，平成 23 年度をもって閉校となった．

* 文化的景観，まちづくり，協働，小学校区，天草

** 熊本大学大学院自然科学研究科博士前期課程

〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1

111d8825@st.kumamoto-u.ac.jp

*** 熊本大学政策創造研究教育センター 准教授

博士（工）naotot@kumamoto-u.ac.jp

**** 熊本大学政策創造研究教育センター 特任助教

博士（工）iwatake@kumamoto-u.ac.jp

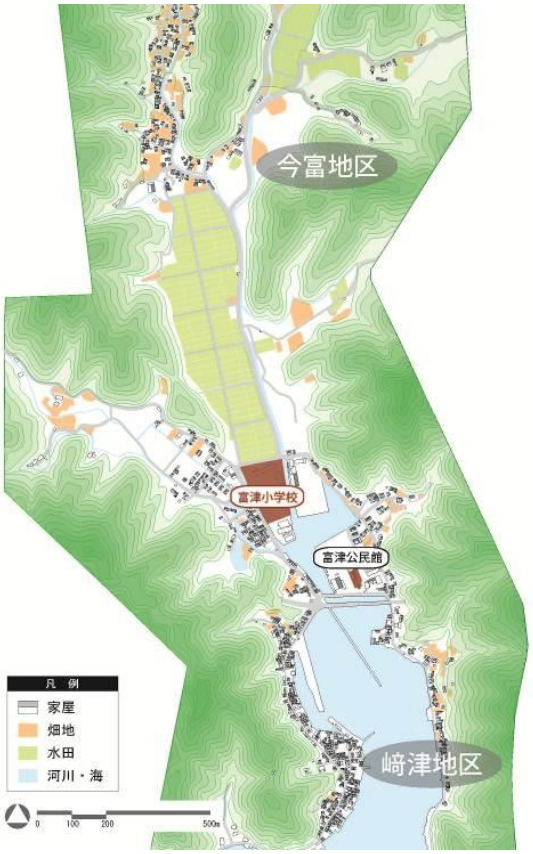

図-1 研究対象地（筆者作成）

２．富津地区における文化的景観保全活動

天草富津地区においては，2011年（平成23）２月に﨑津地区が主な対象地となって「天草市﨑津の漁村景観」として国の重要文化的景観（以下，重文景と略）に選定された．これを受け，平成23年度は，﨑津地区に隣接しキリスト教文化が色濃く残る今富地区を，同重文景対象地の２次申請地域として調査するとともに，﨑津・今富地区として，富津校区における重文景保全活動が展開された．本章ではこの時期の諸活動を表-1に整理した．

(1) 重要文化的景観の申請に関する活動

﨑津地区は，﨑津天主堂がシンボルとなる漁村集落であり，「カケ」や「トウヤ」と呼ばれる生活・生業を表した景観を特徴としている．平成23年２月に「天草市﨑津

の漁村景観」として国の重文景に選定された．一方，今富地区は，山に囲まれた谷合い農村集落を形成し，﨑津地区や大江地区と関係を持つ潜伏キリシタンの墓地や信仰の名残を特徴的に残している．生活・生業に関しても﨑津地区と繋がりが深く一体的な保全が望まれており，重文景の２次追加申請を行った．

(2) 公共整備事業に関する活動

﨑津地区の重文景を対象とした，文化的景観整備管理委員会においては，﨑津地区の「﨑津漁港漁業集落環境整備事業」と今富地区の「砂防ダム」の２つの案件について，委員会が開催されてきた（平成 22～24 年度）．本委員会では，文化的景観保全に関して，諸分野の大学教授等の学識経験者，国・県・市等の関係行政機関，区長や地区振興会長等の地域住民，そして NPO 団体等が議論し，協働を実践している．

(3) 文化的景観保全に関する富津小学校との協働

2011年２月に重文景に選定されたものの，約一年後には富津小学校が閉校することが決まり，平成23年度の活動目標として富津小学校の児童や保護者，教職員との協働が重要となる認識が強まった．平成20年度に﨑津地区を対象に行った文化的景観をテーマとしたまち歩きイベント「﨑津のまちの〇と×」を平成23年度は﨑津，今富の両地区で実施すること，児童や保護者，教職員の方々だけでなく，地域の方々も巻き込んで，文化的景観保全に対する理解を深める活動が実施された．また，富津小学校ＰＴＡ，卒業生を中心とした閉校記念事業実行委員会が立ちあげられ，閉講記念誌の作成や閉校記念式典の実施が企画された．

表-1　富津地区における文化的景観保全活動年表

主な活動		3者の関わり		
		行政	地域住民	アソシエーション
平成22年度				
2月7日	「天草市﨑津の漁村景観」重要文化的景観選定	◎		○
2月9日	第2回　文化的景観整備管理委員会	◎	△	○
2月10日	第2回　文化的景観学術検討会	◎	△	○
3月14日	﨑津カケ復元竣工　NPOさいのつ		○	◎
平成23年度				
4月4日	文化的景観整備管理委員会事前協議	◎		○
4月28日	文化的景観整備管理委員会事前協議	◎		○
5月15日	今富のまちの〇と×	○	◎	◎
5月23日	第3回　文化的景観整備管理委員会	◎	△	○
7月5日	文化的景観整備管理委員会事前協議	◎		○
8月4日	第4回　文化的景観整備管理委員会	◎	△	○
8月6日	﨑津のまちの〇と×	○	◎	◎
10月5日	第1回　母校を考えるワークショップ	○	◎	◎
10月14日	第5回　文化的景観整備管理委員会	◎	△	◎
11月10日	第2回　母校を考えるワークショップ	○	◎	◎
1月13日	富津小学校総合学習	○	◎	◎
2月3日	第2回　文化的景観学術検討会	◎	△	○
2月26日	富津小学校閉校記念式典	○	◎	○

３．小学校との協働による文化的景観保全活動

1875年（明治８）創立された﨑津小学校が，1898年（明治31）に富津（尋常）小学校と改称されて以来，富津小学校は﨑津，今富両地区の方々の母校として長らく地域アイデンティティの基盤となってきた．前章で整理した地域活動のうち，当研究室と天草市教育委員会文化課が中心となって取り組んできた，富津小学校との協働による文化的景観保全活動について整理した．

(1) わたしのまちの〇と×

まち歩きＷＳ「〇と×」の目的として，次世代を担う児童とともに「景観」という視点からまち歩きを行い，文化的景観形成に資する地域資源を発掘するとともに，価値を認識し，その保全や積極的な形成方針を考えることにある．また，世代を超えて様々な視線が重なることで，改めて地域を見つめなおす地域理解・教育活動の一環としての意味合いもある．

a) 今富のまちの〇と×

写真-1　まち歩き
（筆者撮影）

写真-2　壁新聞づくり
（筆者撮影）

【日時】2011 年５月 15 日（日）8：00～11：30

【場所】富津小学校および今富地区

【参加者】富津小学校児童：17 名・卒業生：１名，児童の保護者：７名，富津小学校教師：数名，地域住民：10 数名であった．スタッフとして，天草市教育委員会：３名，エスティ環境設計研究所：２名，熊本大学地域風土計画研究室：15 名が運営を行った．

【目的】例年行っている〇と×の目的に加え，富津小学校の閉校を鑑み，現在富津小学校に通っている児童と，同校を母校とする人々が，自分たちの校区である今富地域について考える場を設けることを，今回提案した．特に，まち歩きの第 1 部では，田畑や小川，森や山といった自然を見て歩くことで，今富地区の現状を知り，〇と×を見つけながら改めて地域を見つめてもらうことを目的とした．第 2 部では，それぞれの班に違った体験テーマを設けた．地域の人から教わる時間を含め，今富地区の歴史や文化を知り，新たな価値を見つけてもらうことを目的とした．

【プログラム】前半の今富地区周辺のまち歩きと歴史や自然や文化の体験学習（２部構成）と後半の富津小学校での壁新聞づくり，発表会とした．

b）崎津のまちの〇と×

写真-3　クルージング
（筆者撮影）

写真-4　壁新聞発表
（筆者撮影）

【日時】2011 年８月６日（土）8：00～11：30
【場所】富津公民館および﨑津地区
【参加者】参加者：富津小学校児童：15 名，熊本市内小中学校児童：３名，児童の保護者：３名，富津小学校教師：数名，地域住民：数名．スタッフとして，天草市教育委員会：５名，エスティ環境設計研究所：２名，熊本大学地域風土計画研究室：16 名が運営を行った．
【目的】﨑津地区では３年前にも同様の〇と×WS を行った．そのため，今回の「﨑津のまちの〇と×」では，ただ地域の〇と×を見つけるだけでなく，子どもたちには事前に家族の方にインタビューをしてきてもらった．インタビューの内容は「両親が小学校時代に好きだった遊び，場所，歌の３つを聞いてくる」というもので，同地区の過去に着目した内容になっている．﨑津地区の過去を振り返り，当日まち歩きを行うことで，地域の現在の姿を知り，過去と現在を踏まえながら，将来の﨑津地区について，大人も子どもも一緒になって考えることを目的に掲げた．
【プログラム】前半の﨑津地区周辺のまち歩き，クルージング，地元の方との歴史学習と後半の富津小学校での壁新聞づくり，発表会とした．

⑵ 母校を考えるWS

富津小学校閉校に当たり，富津小学校ＰＴＡ，卒業生を中心として立ち上げられた閉校記念事業実行委員会のメンバーの方々と，単に小学校関連のイベントとしてだけでなく，地域全体に関わる問題として，富津小学校閉校，文化的景観保全，今後の地域づくりを考えるために意見交換会を開催した．

c）１回目　2011 年 10 月５日（土）19：00～21：00
【会場】富津小学校図書室
【参加者】地域住民：６名，富津小学校教師：２名であった．スタッフとして，天草市教育委員会：３名，エスティ環境設計研究所：２名，熊本大学地域風土計画研究室：４名が運営を行った．
【目的】富津小学校及び校庭について閉校後の利活用案を聞くと共に，富津地区の現状や課題についても考える．
【プログラム】前半の富津小学校や富津地区についての意見出しと模造紙へのまとめ，発表会とした．

写真-5　母校WS
（筆者撮影）

写真-6　総合学習
（筆者撮影）

d）２回目　2011 年 11 月 10 日（木）19：00～21：00
【会場】富津公民館講堂
【参加者】地域住民：12 名，富津小学校児童：３名，富津小学校教師：２名であった．スタッフとして，天草市教育委員会：３名，エスティ環境設計研究所：２名，熊本大学地域風土計画研究室：４名が運営を行った．
【目的】今富地区における文化的景観について理解してもらうこと，また富津小学校閉校後のまちづくりについて，利活用案だけでなく，まちづくりの担い手についても考えてもらう．
【プログラム】前半に文化的景観とまちづくりの関係，２回行った「〇と×」の報告，富津小学校閉校後の跡地利用案のプレゼンテーションを行い，後半にプレゼンテーションを受けて，富津小学校の閉校後の跡地利用や今後のまちづくりについての意見出し，発表会を行った．

⑶ e）富津小学校における総合学習（地域学習）講義
【日時】2012 年１月 13 日（金）10:15～11:30
【会場】富津小学校教室
【参加者】富津小学校児童：23 名，富津小学校教師：５名であった．スタッフとして，天草市教育委員会：４名，エスティ環境設計研究所：３名，熊本大学地域風土計画研究室：４名が運営を行った．
【目的】「富津校区の〇を見つける，育てる」というテーマのもと，登校ルートを始めとして普段見慣れた風景にある地域の良さを再認識し，今後の保全に活かすことを目的とする．
【プログラム】前半に小学校区の地図を元に，登校班ごとに分かれ，登校ルートや，好きな場所，景色，思い出などを示してもらい，写真や付箋を用いて地図作りを行った．後半は，校区の中で自分が好きな風景を絵日記に書いてもらった．

図-2　絵日記

表-2　小学校との協働による文化的景観保全活動の分析

	a）今富のまちの○と×	b）崎津のまちの○と×	c）母校を考えるWS（1）	d）母校を考えるWS（2）	e）富津小学校総合学習
WSのねらい	・地域のいい所，改善したいところを考える ・農村景観の自然に目を向ける ・各世代間の交流を生む	・1回目とは違った新しい視点で地域を見る ・過去と現在から未来を考える ・地域の方向性を考える	・地域について大人の人の意見を取り入れる ・小学校の閉校を地域の問題として考える ・小学校の利活用を考えることでまちづくりとしての策を考える	・小学校の利活用を考えることでまちづくりとしての策を考える ・より広い範囲での地域住民の意見を取り入れる ・地域の担い手，当事者意識を持った策を考える	・子供たちと文化的景観とまちづくりについて考える ・風景と日常生活のつながりについて考える ・小学校の閉校と地域のこれからについて考える
結果	言葉（回） ○ 陸の生き物（41） 植物（40） 水の中の生き物（23） クレソン（13） 山・川・田んぼ（13） 神社（6） 水汲み場（6） 縄ない・わらじ（3） その他（8） × 川が汚い・ゴミ（16） 荒れ地・危険箇所（3）	言葉（回） ○ 食べ物（9） 生き物（8） 船・クルージング（7） 動物（6） 海などの自然・景色（6） 植物（5） マリア像（5） 教会（3） カケ・トウヤ（3） その他（9） × 汚い・ゴミ（13） 危険箇所（1） 未来像 ゴミが無いまち（4） いい環境（3） その他（4）	言葉（回） 地域の課題（17） 地域の現状（10） 提案 動植物の活用（26） 宿泊・福祉施設（18） イベント（11） どういう場所にしたいか（8） 海など自然の活用（5） 閉校前にやりたいこと（4） その他（3）	言葉（回） 閉校まで イベント・行事（11） 教室など学校施設の利用（5） 大学・行政との連携（3） 意識の向上（2） 閉校後一年間 イベント・行事（7） 教室・グラウンドの活用（5） 人が集まる場・しかけづくり（4） その他（6） それ以降 宿泊・観光施設（12） 遊び場（6） 生き物の活用（5） 福祉の充実（5） 歴史学習・展示室（3） その他（5）	言葉（回） 遊び（20） 動物（7） 植物（6） 山・川・海などの自然（6） 景色（5） 建物（5） 登下校（5） イベント（4） 神社（3） その他（4） 写真（49枚） 絵日記（23枚） 向江・崎津公園（5） チャペルの塔・眺め（5） 崎津教会（3） 今富神社（2） 田んぼでの遊び（2） その他（6）
分析	・動植物を中心に地域の○が多く認識され、×についても考えられている ・今富の良さが自然の中に多く認識された ・大人の参加により子どもたちの学習の場となった	・クルージングによって地域の風景に新たな見方が生まれた ・歴史を学び，まちを歩くことで大人と子供が一緒に将来について考えている ・現在の姿に地域の良さを見出し，今後の在り方について考えられた	・住民の考える課題や現状が多く出された ・課題と現状を元に，地域の歴史も踏まえた提案がされた ・小学校の利活用を中心に地域活動へと広がる意見が多く出た	・時間を意識することで1回目に比べて現実的な提案がされている ・「行政」「大学」と連携を表す意見が出た ・まちづくりの当事者として主体的な意見が出ている	・「遊び」といった日常の活動が大きな割合を占めている ・日常の活動が地域の風景を認識するきっかけになっている ・閉校しても校区は持続していくことについて考えられた

4．富津小学校との協働過程に関する分析

文化的景観保全に係る地域活動の中から，特に富津小学校との協働による活動を，各WSの目的とその成果物にみる参加者の理解に関する分析と，全５回のWSを通して，①３者の協働手法，②風景の中にみる価値認識，③持続可能性，の観点から分析した．

(1) 各WSに関する事例分析

a）～e）の５回のWSについて，各回の目的とWSの成果物を分析し（表-2 参照），参加者のWSに対する理解について考察した．

a）今富のまちの○と×

①目的：通常の○と×と同様に，地域の良いと思うところ，改善が必要と思うところを抽出する他に，富津小学校が閉校になることを鑑み，富津小学校の卒業生や地域の方々と交流すること，閉校までの一年間の取り組みについて，思いをはせてもらうことを目的とした．

写真-7　今富の○と×

写真-8　崎津の○と×

②成果：成果の一例を**写真-7** に示した．まち歩きの第一部では，今富地区にあって，崎津地区にないものとして，豊かな農村環境が挙げられることから，自然に多く触れ合ってもらうことを意図して，プログラムを組んだので，その内容に関した「○」が多く抽出された．

③考察：各班に用意したまち歩きプログラムの内容が，成果物として壁新聞に反映されていたこと．生き物や植物について，また「田んぼ」や「はげっぱ山」といった普段慣れ親しんでいる場所，遊びについての意見が多く挙げられたことから，児童たちの今富地区に対する理解のきっかけが得られたと考えられる．

b）崎津のまちの○と×

①目的：今富地区で行った前回の○と×の分析結果を反映して，世代間の交流により主眼を置いたプログラムとした．具体的には，事前に児童にアンケート調査を依頼し，保護者の方々の地域イメージを抽出し，当事者としての意識を喚起した．また，船から地域を見る体験を挿入し，新しい視点を獲得することを試みた．

②成果：卒業生や地域成果の一例を，**写真-8** に示した．通常の○と×の他，地域の未来像についての記述がみられた．

③考察：「海のきれいさ」や「教会」，「マリア像」といったものが○として多く挙げられたこと．船の上からまちを眺めることで，新たに地域の良さを発見できたこと．地元の方の参加によって過去を知る機会を得られたこと．未来について「ゴミが無ければ今のままでもいい」，「綺麗な海」といった意見があり，現在の地域の良さを活かして継承することの大切さが見られたこと．

c）母校を考えるWS（1）

①目的：現役の児童だけでなく，富津小学校を母校とする地域の方々に広く，閉校後の小学校及び校庭の活用策を考えてもらうことを目的に，まずは，閉校記念事業実行委員会の方々を対象として，WSを行った．

②成果：成果の一例を，**写真-9** に示した．短時間ではあったが，多くの利活用策を得ることができた．

③考察：住民の考える地域の課題，小学校閉校後の跡地利用，校舎利用について自由な発想から，多くの提案が聞かれた．また，WS中に，それらの実施の具体性や主体についての不安についても聞くことができた．

写真-9　母校第１回

写真-10　母校第２回

d）母校を考えるWS（2）

①目的：第一回の母校を考えるWSを受けて，富津小学校を母校とする地域の方々に広く参加を募り，閉校後の小学校及び校庭の活用策だけでなく，時間軸を考慮してもらうことで，まちづくりに担い手や当事者としての意識喚起を目的とした．

②成果：成果の一例を，**写真-10** に示した．参加者が思ったほど得られなかったが，児童の参加もあり，多様な参加者を獲得することができた．

③考察：一回目から引き続きの参加者もあり，２回目ということで，より実現可能性のある意見，まちづくりの当事者としての意識も見ることができた．WSの成果物には「行政と住民との連携」という意見も見られた．

e）総合学習（地域学習）の分析

①目的：現役の児童に，文化的景観保全について学んでもらうことを目的として，自分の好きな場所や，通学路といった身近な風景を題材として，地域学習の課題を体験してもらった．

②成果：学習の成果を，**写真-11，12** に示した．

③考察：児童が，通学路や普段の遊び場，思い出の場所を通じて，地域環境や人々との結びつきを風景として捉えていることが理解された．また，この通学環境が変わってしまうことに対する不安や，教員側の心配もあった．文化的景観保全に対する総合的な理解を促すとともに，地域を自ら歩くことで得られる体験が重要であると推察された．

写真-11　風景地図１

写真-12　風景地図２

(2) 通年の事例分析

前節でのａ）～ｅ）の５回のWSの成果物の分析と考察から，１年間を通して見た時の各WSについて，①行政・地域住民・アソシエーションの３ステークホルダーによる協働が見られること：３者の協働，②風景の中に地域の価値が認識され，その価値が共有されていること：風景の中の価値，③持続可能性があること：持続可能性，の視点から分析を行った．

①３者の協働：「今富のまちの○と×」では，児童が参加することで，保護者やお年寄りなど地域住民の方々の多様なステークホルダーの参加が見られた．そのなかで，子どもと大人といった住民の中での世代間交流が生まれ，ステークホルダー内での交流のきっかけとなるとともに，地域について考える機会を得た．「﨑津のまちの○と×」についても多様なステークホルダーの参加から，地域の過去と現在を知り，共に未来について考える場を共有することができた．「母校を考えるWS」については主に地域の大人たちと，行政の人が共に地域について話し合う場となった．「総合学習（地域学習）」では，これまで富津地区に関わってきた大学と，「○と×」などの活動を通して一緒に活動した富津小学校の児童，行政とのつながりが見られた．　通年活動を重ねることで，３者の協働の機会が生まれた．

②風景のなかの価値：「今富のまちの○と×」では，子供たちが指摘した耕作放棄地の風景が，地域の本質的課題を示している，と地域住民の口から言葉になった．また，普段から親しんでいる日常の景色や，歴史，生業が風景の中で良さとして認識されていることが分かった．まちを歩き成果としてまとめることで，新たに地域の価値を多く理解することにつながった．「﨑津のまちの○と×」では，クルージングによる海からの視点が地域の

風景の良さの再発見につながった．眺めとしての海だけでなく，生物のいる場所，地域の生活・生業の中心となっている場所として海に地域の価値が認識されていることが分かった．「母校を考えるＷＳ」については小学校が地域の中で活動の場や交流の場，思い出の場所として大切にされている事が分かり，地域の風景の中に果たしている役割の大きさが感じられた．地域の中心となっていた小学校の校庭や校舎の活用を考えることは，地域の風景を考える上でも重要な役割を果たす．「総合学習（地域学習）」については日常の風景が地域の風景として多く認識されていた．日常の在り方が地域の風景の在り方に大きく影響することが分かった．

③持続可能性：「今富のまちの○と×」について，10年前まではこうではなかった，こんなにゆっくりと地域を歩いて回ることはなかったなど，今後も実施可能であり，なるべく日常化していく必要があることが示唆された．大人と子供，また大人のなかでのお年寄りと若者といった各世代間の交流が生まれ，地域の持続について可能性が見られた．「﨑津のまちの○と×」についても同様の可能性が見られた．特に２回目である﨑津では現状を見るだけでなく地域の将来像についても考える機会が生まれた．地域活動を継続することが，地域の持続可能性へのつながりを持っていることが分かった．「母校を考えるＷＳ」について，特に２回目のＷＳでは半年後・１年後・再来年以降といった段階を踏みながら継続的な地域の活動，今後の地域の在り方，その為にすべき活動や果たす役割を考える機会となり，地域の持続可能性のためのまちづくり活動を小学校の閉校をきっかけとして考えられた．「総合学習（地域学習）」については，子どもたちにとって，遊びといった日常の活動が地域の風景としての認識を深めていることが分かった．この総合学習が，地域の風景を考え小学校の閉校と共に今後の小学校区の在り方を学ぶ場となった．これまでのまち歩きなどの活動も風景を認識するきっかけとなっており，非日常を日常へと組み込んでいくことも持続可能性へとつながると考えられる．

５．おわりに

天草市富津地区の文化的景観保全に係る活動について，地域住民の母校となる小学校区に着目して，「３者の協働体制」，「風景の中での地域の価値」，「持続可能性への考慮」について，分析した．通年の文化的景観の活動から、景観まちづくりとしての要件が見られ，文化的景観保全のまちづくりと景観まちづくりのつながりを考察することができた．

謝辞：この研究を行うにあたり，適切なアドバイスを下さった天草市の平田豊弘さん，天草市教育委員会の皆さまに感謝致します．また，1 年間研究室の活動にご協力頂いた森田さん，富津小学校の子供たち，富津地区住民の皆さまに感謝致します．ありがとうございました．

参考文献

1) 景観デザイン研究会：景観用語辞典　増補改訂版，株式会社彰国社，ｐ10，2007
2) 田中尚人，平田豊広，原田茉林：天草市の文化的景観保全にみる地域社会の協働過程に関する分析，土木計画学研究・講演集第43巻，2011
3) 芥慎太郎：天草今富地区における暮らしに根ざした景観構造に関する研究，熊本大学卒業論文，2012
4) 野原浩大朗：文化的景観保全に係る地域社会の協働に関する分析，熊本大学卒業論文，2012